

P. Weiss のスポーツ哲学に関する構造分析 — とくに問題設定の部分について

片岡 暁 夫

A Structural Analysis on *Sport, a philosophic inquiry*, by Paul Weiss —
especially on its first and second chapters

Akio KATAOKA

In this study, the chapter 1 and 2 of the *Sport, a philosophic inquiry*, by Paul Weiss were studied from the structural — analytical standpoint by the methods of analytical philosophy and linguistic theories.

As a procedure of this study, the nouns used in chapter 1 were organized in the alphabetical order and then counted the numbers of appearances of each word. From this result, frequencies of nouns were classified and the main words were selected. These main words were analysed by its contexts and then the meanings were clarified. From these meanings the structures of meanings of each chapter were discussed and the results were shown as figure 1 and figure 2. From the results of word countings and its understandings in chapter 1 of the text, it was inferred that the words “body” and “common” had the most meaningful notions. And the result of chapter 2 suggested that the situation and thoughts in 1960's of American athletics influenced upon the author's thinking and made him think critically and made him construct fundamentally the sport philosophy.

Basically, the notion of “body” of Paul Weiss played very important role in chapter 1 and 2, and it may be safely said that the notion will play important role in following chapters.

From these results it may well be suggested that the above stated procedure is effective to understand the text of sports philosophy.

1. 緒言及び方法論的検討

北米を中心として発展しつつある P. S. S. S. (Philosophic Society for the Study of Sport) の Founding President である Paul Weiss は哲学者である。この哲学者が P. S. S. S. Founding President となったのは、その著 *Sport, a philosophic inquiry*¹⁸⁾によると考えられる。このような

意味で、この著作の内容を吟味することは、わが国のスポーツ研究にとっても有意義であると考えられる。P. Weiss もこのテキストの中で述べているように、この内容は哲学の分野に属する。「非合理的な、デモーニッシュな衝動から哲学は生まれる。生まれた哲学は、厳密な文献学的な考察の対象となる。しかし、哲学そのものは文献学からは生まれない」¹²⁾とのべられるごとく、P. Weiss の哲

学を検討し、解釈することが本研究の目的であって、新たなスポーツ哲学を生み出すことを目的とするものではない。「文献学は主観をまじえずに、文献をできるかぎり客観的に忠実に理解することを目的とする。学問の一つの徹底した形がそこにあると思われる」¹³⁾のである。いわゆる文献学的手法はギリシア・ローマの文献について西洋で発達したものであるが、基本的な態度については本研究においても踏襲することが可能であろう。

本研究においては、論議の対象となる著作、すなわち、言語によって構成された対象と、それについて論ずる言語表現、すなわちメタ言語が区別される。しかし、スポーツ哲学として言語構成された中にも対象言語とメタ言語が多様に使用されている。この被分析語と分析語の関係は次のように規定される。「被分析語と分析語とは、意味の階層構造に関してレベルを異にしなければならない。むしろ、分析語は被分析語よりもレベルが高い。同じレベルの言葉（或は概念）の間に分析は成り立たない」¹⁴⁾のである。分析するということを哲学とするとほぼ同義であるとするれば P. Weiss がスポーツについて哲学したということは、哲学的な分析をなしたと考えてよいということになる。この過程は、自然言語から、自然言語に即してスポーツ哲学的な言語体系を合理的に再構成したものであり、メタ論理学的対象として見ることもできる。¹⁵⁾ P. Weiss の言語は、それ自体としてまず曖昧な言葉として読者にあらわれてくるが、それを解釈し、理解することは、すなわち、それらの言葉について、それらの内包を決定することであり、「分析的な反省的分析」を行なうことである。¹⁶⁾

ソシュール、フロイト、デュルケム等は、社会を個人の行動の結果とするのではなく、むしろ、「個人が意識的あるいは無意識的に同化吸収した集团的・社会的な体系によって行動は可能になる」¹⁾と考えた。この立場に立つと、P. Weiss の哲学的記述は、P. Weiss の内部に無意識的に同化吸収された米国の大学におけるスポーツや米国社会の体系が、このスポーツ哲学に関する著述をなさしめたと見ることもできる。つまり、特別な行為としてのスポーツがなぜ意味をもつのかを示すために、スポーツ的行為を可能にする「根底所在の

機能、規準、範疇の体系に関係づけようと試みていると見るができる。」したがって P. Weiss が書いている間に、彼が「心中に持っている」ものは、「永続的に刻みこまれた言語の全体系」³⁾である。そしてその言語に付随する意味は、「存在体であるよりはむしろ差異的価値の束であること、差異の体系のうちの空間であること」⁴⁾と解されるのである。能記として書かれた語は、読解者の前にあらわれ、「意味を約束し、われわれを挑発して意味の搜索へと向かわせる」⁴⁾のであり、差異空間が解読されなければならないわけである。しかし、その解読は、やはり言葉によってなされなければならないのであり、先述のように、被分析項と同じ意義を持つ分析項により表現されなければならない。¹⁷⁾このような意味で、P. Weiss は、その哲学的考察の中で分析を用いているのであり、スポーツについての哲学的な意味空間を形成し、それが言葉として表現されていると考えられる。

理論には、一般的な理解、すなわち言語外の対象を主題とする理論とメタ論、すなわち言語を主題とする理論があるが、本研究は語用論、すなわち、作品と言語の使用者 (P. Weiss) との関係进行分析するメタ理論的な立場をとるわけである。

さらに、読者としての解釈者が作品に形成された言語を対象に作り上げる関係がある。読者の側にもスポーツに拘る意味空間があり、それは、読者の心の中にある。この差異空間と P. Weiss の差異空間は不一致であろう。そこに同じ能記に対して異なった所記が出現するという可能性があり、最初に述べた文献学的態度では、無限に P. Weiss の空間に接近する努力が払われることになる。その一つの方法は、原文を日本語化して理解しようとするのであろう。つまり、英語でのべられた意味空間を日本語で表現していこうとする努力である。これは本研究における一つ的方法的段階であるといえよう。

日本語化されたということでもって理解が完結したとはいえない。指示体としてスポーツ活動は、平板な言語の連続では表現されえず、多様な意味の重みからなる差異空間として言語化されているのであるから、意味論的分析についても、解釈者は努力することが要請される。またさらに、能記

としてあらわされた文章間についての関係を検討する構文論的な分析も必要になると考えられる。

スポーツ論を人間研究という立場から位置づければ、ソシュールに学んで、スポーツを研究することは、本質的に人間とスポーツとが、「それによって世界を組織し、世界に意味を与えるところの様々な体系を研究することである⁸⁾」ということになる。この場合にソシュールのいうラングとパロールの関係が区別されなければならない。ラングが形式の体系としての言語であるのに対し、パロールはラングの遂行的側面である⁹⁾。「ラングとパロールのあいだの区別は、言語学以外の他の教科にとっても重要な帰結をもつ。それは本質的に制度と事件のあいだの区別であり、行動の様々なタイプを可能ならしめる根底的所在の体系と、そのような行動の現実の実例とのあいだの区別だからである。体系の研究は、形式と、それら相互の関係と、それらの結合の可能性とを表示するモデルの建設へと導き、これにより、現実の行為すなわち事件の研究は、様々な状況のもとにおける個別の結合の確率を表示する統計的モデルの建設へと導くからである¹⁾」スポーツの哲学的研究においては、当然パロールよりもラングを求めて反省的分析がなされるわけであるから、パロールを捨て去るのではなくて、利用しながら、ラングへといいたことが、読者としての解釈者に要請されるであろう。

このような意味で、P. Weiss の文章をパロールとして措定するならば、様々な状況のもとにおいて用いられた能記としての言葉を確率的に表示し、統計的なモデルを作ることが試みられる。このようなモデルは、ラングを求める場合の補助として有効であると共に、或る程度、読者としての解釈者が有する意味空間と、著者としての P. Weiss の有する意味空間の間のずれを調整する媒介的作用を果すことと考えられる。

仮説：P. Weiss のスポーツ哲学を理解する上に鍵となる用語を整理することにより、彼のスポーツ哲学をより一層構造的に理解しようとする。そして、折出された用語間の有機的組織的關係が発見される手がかりとなろう。

本研究で用いられる手順：P. Weiss の著作の

中から、“Sport, a philosophic inquiry” を選び、そのうちの第 1 章および第 2 章に限定する。この対象について、用いられている名詞を取り出し、アルファベット順に整理する。この表をもとに、各章にあらわれる同一名詞頻度を求める。集計は章毎に行なわれる。

名詞が代名詞によって置き換えられた場合は頻度の集計に繰り入れられる。ただし、これは文章の主語の位置にある場合に限定する。なぜならば、一般に代名詞として反復される場合には、その言葉は文脈上かなり重要な位置を占めており、反復されるので、代名詞に限って主語に限っても、その名詞の頻度は十分に増加するからである。また、いくつかの名詞を一つの代名詞で受ける場合には、それぞれの名詞に一つずつ配分することとした。また、頻数の多い言葉については、その形容詞形などについても考慮した。析出された言葉の関連づけは、量的な側面を考慮すると共に、テキストの全和訳（1～15章）を行ない、その文脈の解釈に基づいて検討された。統計的な操作をする場合は、ソシュールのいう意義と価値の区別はなされない⁸⁾。つまり、パロールとしての文脈上の意味である意義は無視して、言語単位が体系のうちに持つ意味である価値として扱い、集計した。意義については、和訳過程で理解されたもので補なわれる。さらに、P. Weiss の所与の能記と所記の作品中の連結については、歴史過程における偶成的な結果⁹⁾として、作品の書かれた1960年代という共時的な眺望において、関係が吟味される。

P. Weiss には1930年代から続く幾多の哲学的著作があるがそれについては、本研究の対象外とされる。

取り出されたいくつかの概念については、そこにどのような差異があるかが分析される。すなわち「形式はすでに与えられているものではなくて、関係と差異との体系を分析することによって設定されなければならない¹⁰⁾」からである。表象が導入され、その非連続性に焦点が当てられるのである。このようにして「無意識的に知られている関係の体系を突きとめようと求めている¹¹⁾」ことも解釈の役割であろう。

なお、第 1 章および第 2 章を対象としたのは、

この小論の枚数の問題もあるが、当該作品中において、第2章までが一つの区切りとなっているからである。第2章の最後に次のような文章が来ている。

There are at least three, and perhaps four, stages the athlete goes through in his progress toward self-completion... The next eight chapters attend to these different stages.¹⁹⁾

次にくる8章への問題設定が第1章及び第2章の内容であることがわかる。

2. 名詞の統計的析出とその解釈

(1) 第1章 concern for excellence の用語構成とその解釈

Table 1のような結果から、第1章において多頻度の用語は、近縁用語群にまとめると Table 2 のようになる。

以上の結果を図示したものが Figure 1である。頻度に従って階層化すると、5段階に分析されて

いると見ることができる。第1段階は、athlete である。第2段階が sport であり、第3段階に philosopher と youngman とが並ぶ。そして第4段階に Greeks で表示したギリシアの哲学者達に関わる名詞群と excellence とが並ぶ。そして第5段階に common と body が並ぶ。このような結果は、P. Weiss によって意識的に出されたものではない。用いる言葉の反復回数などは全く考慮の外であろう。

この結果について、文脈上から関連の線を入れると、基本的にはスポーツを行なう人としての athlete が被分析項として浮び出る。そして、芸術などと対比される領域概念としてスポーツが出る。athlete と sport には意味空間としての差が出されていると考えられる。第3段階では、athlete を観察し分析する者としての philosopher - Greeks の線と実際に athlete の中心となる youngman の線に分離する。P. Weiss にとっては、athlete の分析項として youngman が提出され、老若男女と

Table 1: Frequencies of main words in chapter 1

(1) athlete	71	(24) game	7
(2) athletics	2	(25) Greeks	25
(3) athletic	3	(26) history	8
(4) attraction	1	(27) life	6
(5) body	17	(28) man, young	25
(6) bodily	1	(29) need	2
(7) common, the	7	(30) participant	3
(8) common	10	(31) non-participant	2
(9) commonality, the	1	(32) perfection	6
(10) champion	1	(33) performance	5
(11) corrupt, the	1	(34) philosopher	22
(12) contest	3	(35) philosophy	3
(13) dedication	2	(36) philosophic	5
(14) devotion	3	(37) philosophical	2
(15) desire	3	(38) philosophically	2
(16) drive	3	(39) Pleasure	3
(17) emotion	4	(40) spectator	6
(18) enthusiasm	2	(41) satisfaction	4
(19) excellence	17	(42) sport	58
(20) excellent, the	8	(43) value	3
(21) excellent	3	(44) young, the	9
(22) form, Form	4	(45) virtue	2
(23) good	4	(46) record	8

Table 2: Order of frequencies of words in chapter 1

1. athlete, athletics, athletic	(71 + 2 + 3 = 76)
2. sport	(58)
3. philosopher, philosophy, philosophic, philosophical, philosophically	(22 + 3 + 5 + 2 + 2 = 34)
3. youngman, the young	(25 + 9 = 34)
5. excellence, the excellent, excellent	(17 + 8 + 3 = 28)
6. Greeks	(27)
7. body, bodily	(17 + 1 = 18)
7. the common, common, commonality	(7 + 10 + 1 = 18)

いう差異系列と athlete - 非 athlete という差異系列が交錯したところに athlete - youngman の関連が生じていると見られる。第13章に女性とスポーツを扱った議論で補なわれているとはいえ、ここに中心があると思わせるのである。youngman をさらに分析する言葉として、excellence が提出されている。P. Weiss において、若者の特徴として excellence の追求が位置づけられていることがわかる。被分析項と分析項との関係で見れば、youngman と excellence の追求は同義でなければならない、従って、単なる歴年令上の youngman ではないとも考えられる。さらにこの excellence の分析項として body が位置づけられる。body については、P. Weiss の他の著作において、いろいろな箇所において考察がなされているわけであるが、これについての詳論は別稿にゆずる。ただ、ここでは、それは死体ではなくて、生きている人間の身体として把握されているということを述べておく。excellence は body における excellence であるから、athlete とは、結局、P. Weiss にとっては、若くて、身体的卓越性を追求する者として定義されるような傾向にあると考えられよう。

philosopher - Greeks の関連は、athlete を無視して来たものとして文脈上位置づけられている。P. Weiss を例外として、彼自身も philosopher に入るのであるが、athlete という人間存在について考察を行なって来なかった原因がギリシアの影響として論じられている。そして、その根拠としての common の概念が位置づく common の概念は本文中で二種類の意味をもつものとして論じられているけれども、ここで問題となるのは、

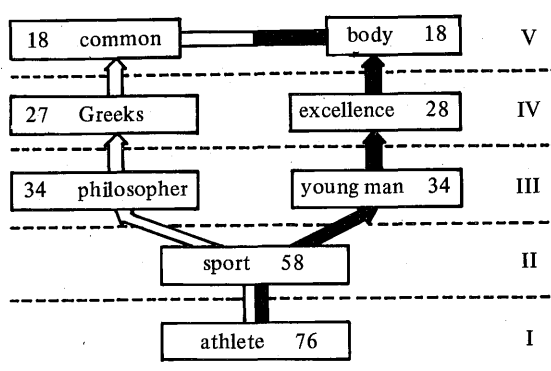


Figure 1: Relations among words

哲学者が一般に common なる存在を反省の対象から除外して来たということである。そして、ある意味での対象的概念として excellence が位置づき、当然、哲学的反省の対象となる資格を有する概念であるのであるが、body が介在することによって反省の対象から除外されてきたと見られるのである。それは、まさに common の概念と body の概念が意味空間上十分に差異を認められるとはいえ、非常に近い位置にあることを示唆している。body と excellence の結合よりも、body と common の結合の方が強いであろう。例外者としての P. Weiss は、ラングとしての根底において、common と body の結合に承認を与えようとしていると考えられる。歴史的に無視されて来たものを取り上げ、価値観の反転を求めようとしているようである。

このようにして、athlete という言葉は、哲学的議論と深く結合する common と body の概念

に突き当たるのである。この点についての分析は別稿にゆずる。

(2) 第2章 attraction of athletics の用語構成と解釈

第2章について調査対象となった名詞の中の主なものは、Table 3 のとおりである。

Table 3 のような結果から頻度別に階層分けをすると Table 4 のようになる。

階層1にある1～3の用語は、第1章の分析において1位 athlete 2位 sport 3位 youngmanであったのと比較すると、youngman が1位に出ていることが注目される。被分析の中心が競技者(athlete)から、若者に移ったことがわかる。本章の表題が attraction of athletics であるから、attraction を分析するためには、若者という状況でなければならないのだと考えられる。若者とは、

Table 3: Frequencies of main words (nouns) in chapter 2
+ used as nouns 8, as verbs and infinitives 11

(1) act	3	17
(2) activity	11	
(3) action	3	
(4) aggression	13	21
(5) aggressiveness	7	
(6) aggressor	1	
(7) athlete	56	76
(8) athletics	20	
(9) attraction	3	
(10) body	17	28
(11) character	9	
(12) child	27	
(13) childhood	1	
(14) college	9	
(15) coach	10	
(16) energy	19	
(17) life	12	
(18) others	16	
(19) play +	8	
(20) program	12	
(21) reality	7	
(22) result	9	
(23) sport	60	
(24) theory	13	
(25) time	12	
(26) young man, the young	97	

心理的にも身体的にも、また社会的にも独特の状況にあり、sport に魅惑される原因を持った存在だからだと考えられる。

次いで、athlete を中心として分析される。なぜ、athlete に成るのが問われている。若者全員が athlete に成らないゆえに、若者の中の特に athlete が分析されるわけである。

sport は活動の領域名称であり、他の音楽とか哲学といった諸領域との差異において意味が与えられているのであり、例えば、「学校当局は特にスポーツに力を入れている」というように用いられている。

第2層の child は youngman と区別されるものとして位置づけられている。youngman の意味は、adult-youngman-child の関係で生み出されている。adult の用語数は3と少数であり、youngman-adult の間の差異は明白であって、あまり論議の必要がなかったものと考えられる。これに対して、youngman-child の間の関係は、かなり分析される必要があったといえよう。この

Table 4: Classification by frequencies

Class	Freq.	Total
I	1. young man, the young	97
	2. athlete, athletics	76
	3. sport	60
II	4. child, childhood	28
	5. aggression, etc.	21
III-A	6. energy	19
	7. activity, etc.	17
	8. body	17
III-B	9. others	16
	10. theory	13
	11. time	12
III-C	12. program	12
	13. life	12
	14. coach	10
III-D	15. character	9
	16. college	9
	17. result	9
IV	18. play	8
	19. attraction, etc.	

関係が非連続であると認識されていることはいうまでもない。この区別についての詳細な論議は、後の方の章で出てくるが、ここではそれに言及しない。

第三層は性質の異なる概念が混在している。しかし、これらを統一するのは、なぜ若者たちが競技に参加するのか、競技の魅力は何かという問いに関係しているということである。この点については、常識的な諸説もあれば、科学的説明といわれるものもある。これらの諸説に対して、批判的に分析していくのがこの章の大筋である。

「aggression」は、スポーツ参加の理由を説明する説の一つを代表している。この説が分析され否定される。

「energy」もまた参加説明の理論であるが否定される。例えば、「エネルギーの余剰範囲を越えて努力がなされることがある」ということで否定される。

「activity」は、例えば、athletic activity というように用いられるから、athletics 以外の活動を指示するためにも用いられている。用語上、とくに athletics や sport と密接に関係するものではない。つまり、様々な形容詞と共に用いられて所記が変化するものとみられる。

body は、第 I 章で見たごとく、P. Weiss のスポーツ哲学における根本概念の一つであると考えられる。第 2 章においても同じ使われ方をしている。例えば、次のような用例が見られる。

- 1) fine *bodies* and excellent character (p.30).
- 2) what a man can be and do with his *body* (p. 30).
- 3) for exhibiting and testing how excellent one can be by putting all his energies at the service of his *body* (p. 34).
- 4) Athletics puts primary emphasis, not on the effort to subjugate others, as a theory of aggression maintains, but on the opposite effort to deal properly with other realities, in order to enable one to become excellent in and through the use of a *body* (p. 36).
- 5) There is first his acceptance of his *body*, car-

ried out in training and practice (p. 36).

- 6) young men want to have fine functioning *bodies* and --- (p. 19).

これらの用例は、すべて、単に身体が存在としてあることを意味するのではなく、方向性を持った、取り組まれるべき対象として位置づけられていることを示している。このような基本的な意味は、第 1 章において位置づけられた *body* の意味と一貫しているといえよう。

上記の用例 4) に見るごとく、(athletics の魅力に関する) aggression theory を否定する P. Weiss の理論を成立させる中心概念としても *body* は用いられているのである。

Ⅲの A の 9 others は 16 の用例がある。これは端的に他者として言い得るが、誰に対する他者であるかを調べると三種類にまとめられる。すなわち、1) 若者に対する他者、2) 競技者に対する他者、3) 人間一般における他者である。このうち重要なのは、athlete にとっての他者である。この両者の関係について、a) 対立する者としての他者、b) 判定を下す者としての他者、c) 権利を尊重される者としての他者、d) athlete と区別される者としての他者、e) athlete が代理的に機能する者としての他者である。したがって、この others の概念は、主として被分析語 athlete を分析するために差異を設定する語として働いているのであり、athlete に意味を与えているといえよう。

Ⅲの B の 10) theory は、本章が魅力の源泉を説明するところにあるので比較的多数用いられたと見られる。

Ⅲの B の 11) time は、単なる時間量として内実に関係なく用いられる場合と、athletic の重みを込められた時間、すなわち、何かを犠牲にして得られる時間として用いられる場合がある。例えば、

But given the amount of time, and the punishments that athletic life involves, as well as the loss of freedom that it too often entails, it would seem that many athlete could have made a better choice (p. 27).

のごとくである。

ⅢのBの12)の program は、P Weiss の置かれたアメリカの大学スポーツ界の思想と現状を象徴する概念を持っている。例えば、

Nor can it justifiably overlook the sad fact that in many an educational institution, athletic programs, because geared to please the public and alumni rather than to help the young mature, serve to hurt those whom it should help (p. 31).

これは、スポーツ関係者によって答えられる本章の主題に対する解答に対して批判的に分析を進める過程に出てくるのであるが、P. Weiss の現状に対する立場を反映する文脈の中に位置づいている。現状に対する批判と建設的なスポーツ哲学の提起がこの著者の任務として主体的に受け止められていたと考えることができる。ⅢのBの14 coach, 15の character, 16の college もこの文脈の中にそれぞれ位置づけられる。program(12) + coach (10) + character (9) + college (9) =

40とまとめることもできる、そしてさらに、先述した aggression theory をも、アメリカスポーツ文化の現状を反映する理論であると考えれば、 $40 + 21 = 61$ となり、第1階層の量に匹敵することになる。

以上のように見てくると、本章の構造は、Figure 2 のようになるというよいであろう。

Table 4 の階層Ⅳについては、ここに上げた attraction の他に、多数の用語があり、それぞれ頻度は少ない。しかし、分析の階梯からいえば、最も高次の段階にあるともいえるのであるが、被分析語を多数の言葉によって把握し、概念を追求しているゆえに、大筋としては無視してよいであろう。もちろん、この中には、以下の章において主要な被分析概念として出てくるものが含まれている。これらについては別稿において論じられるであろう。

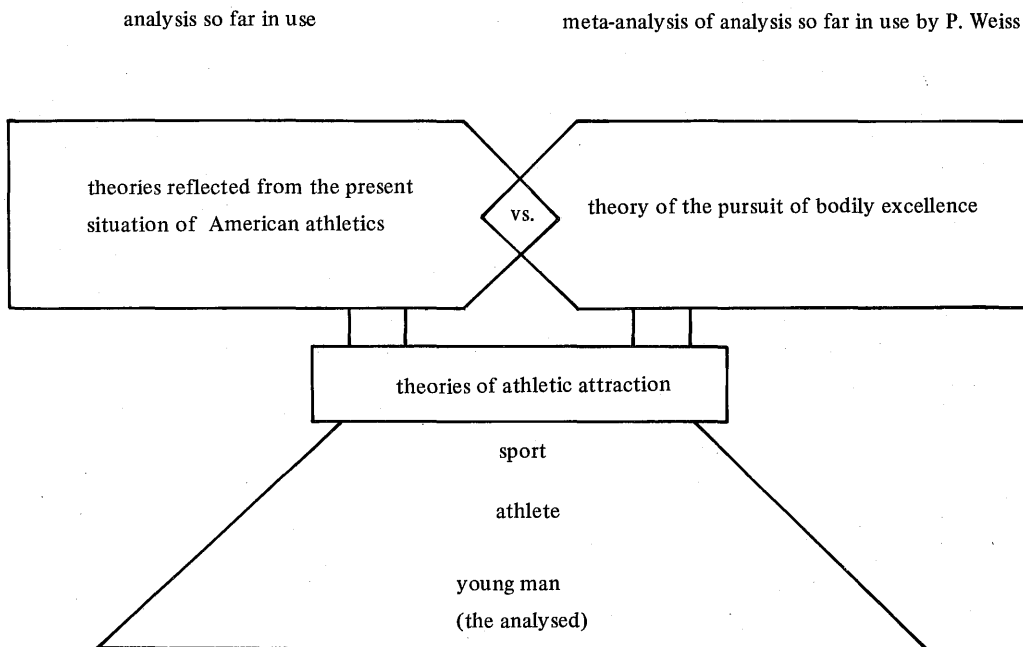


Figure 2: Structure of the chapter 2

3. 総括

本研究では、文献学的態度に立ち、分析哲学および言語学的方法に依拠して、P. Weiss の *Sport, a philosophic inquiry* の第1章と第2章が解釈された。その手順として、用語とくに名詞の頻度が集計され、階層分けされた。こうして出された名詞の中から、頻度によって主要名詞が選ばれ、それについて文脈、用例の観点から意味が追求された。この意味の追求にもとづき、概念の関係が構造化された。

このような方法によって、仮説として提出された「P. Weiss のスポーツ哲学を理解する上に鍵となる用語を整理することにより、彼のスポーツ哲学をより一層構造的に理解できるだろう」という命題は、かなり正しいと言えると考えられる。また、用語整理が「析出された用語間に有機的組織の関係が発見される手がかりとなろう」という命題についてもほぼ妥当であると考えられる。

第1章の用語整理および解釈から、body および common の概念が重要であることが推論された。(Figure 1)

第2章では、現状(1960年代)とそれに対する P. Weiss の批判と問題把握が対決されるという構造が推論された。

そして第1章および第2章を通して、追求的な方向性を持った body という概念が重要であると推論された。

以上のように、ごく限定された範囲について検討したのであるが、さらに方法論的吟味を重ねると共に、実際に適用することにより方法をより理論的なものへと発展させていくことができると思われる。

最後に、複雑な整理を手伝ってくれた準研究員近藤良享君他、大学院生諸君に感謝いたします。

引用注

- 1) カラー, J 著, 川本茂雄訳「ソシユール」, 岩波現代選書12, 1978年 p.105.
- 2) 同 上 p.107.
- 3) 同 上 p.166.
- 4) 同 上 p.166.
- 5) 同 上 p.174.
- 6) 同 上 p.38.
- 7) 同 上 p.44.
- 8) 同 上 p.43.
- 9) 同 上 pp.47.48.
- 10) 同 上 p.101.
- 11) 同 上 p.137.
- 12) 小泉仰, 小山宙丸, 峰島旭雄編, 「比較思想のすめ」, ミネルヴァ書房 1979年, pp.200, 201.
- 13) 同 上 p.198.
- 14) 永井成男, 「分析哲学—言語分析の論理的基礎—」弘文堂, 1959年, p.207.
- 15) 同 上 p.41.
- 16) 同 上 p.217.
- 17) 同 上 p.175.
- 18) Weiss, P., *Sport, a philosophic inquiry*, South Illinois University Press, 1964.
- 19) *ibid.* p. 36.